

臨床心理士・公認心理師試験対策授業を見学して

留学生教育センター特任講師
経営学博士 岡田高明

令和3年1月30日開催の臨床心理士・公認心理師試験対策授業を見学して感じたことは、大要以下のとおりであった：

- 授業冒頭に、中島総長より、本授業の目的は臨床心理士試験に学生が合格することであり、そのために必要なことだけを学習すべきであるとの指摘があった。確かに、本授業は、試験対策授業であり、通常の授業とは違うことを認識した。
- 次に、担当教員の指導により、過去問の演習が行われた。教科書（平成30年度試験問題集）の問題22から順次演習が行われた：
- 各問題については、指名された受講生がまず問題を読む、次に問題と解答を読ませ、全受講生に回答用紙に正解を記入させ、その後、時間を与え正解を暗記させるというものである。中島総長からは、授業が淀みなく効率よく進行するように担当教員に対して指示があった。授業をテキパキと進行させることは、受講者の集中力を高めるものになると感じた。また、自らの授業においても、授業のスピード感は重要なポイントであると思った。ただし、小職の授業の受講者のほとんどは、日本語があまりうまく話せない留学生であることから、効率的、スピーディーな授業進行と学生の集中力及び授業への関心の維持向上とのバランスには、常にビデオで学生の様子を注視する必要があるものとも感じた。
- さらに、中島総長より、目的や目標の方向性のブレないポイントをついた無駄のない授業が、試験の合格には欠かせないとの指摘があったが、この点については、試験対策授業のみならず、小職の担当する学部的一般教科授業においても再認識すべきことであると感じた。こうしたことが、学生の授業への関心を高めるだけでなく、学生の満足度の向上にもつながるものと思えるものだ。
- 小職の授業に参加する多くの学生（留学生）の本学で勉学をする主な目的は、①日本の大学を卒業すること及び②日本の企業に就職することなどである。これらの目標を学生が達成するためには、(1)履修科目の平均のGPAがB以上であること、(2)日本の企業に就職できるだけの日本語力（特に文章力）を身につけることであろう。
- 上記(1)について、小職の毎回の授業では、必ず、質問の演習を行っているが、これまでは、比較的、安直な問題を避け、学生によく考えさせるとの観点から、教科書を熟読しないと正しい回答が書けないような問題を設定してきた。しかし、中島総長の指摘のように、学生に成功体験を与えること

が、能力の向上に結びつくことから、学生が正解に到達できるよう、設問の仕方等を工夫する必要がある旨感じた。

- 上記(2)については、Zoom におけるインターネットの不安定な環境と授業の円滑な進行を考慮して、授業では、学生による輪読ではなく、小職（教員）による講読（朗読+解説）並びに学生に、音声をミュートし、各自で音読するよう指導してきた。しかし、本学のアクティブラーニングである輪読が、日本語能力向上の上でも、最適なものであると再認識し、輪読を再開する考えに至った。
- これまで 2 回にわたり、授業見学をし、自らの授業について、改良すべき点が多々あることがわかった。示唆に富んだ授業見学になった。